

東京ユニバーサルフィルハーモニー管弦楽団

春風はアラブから

創立10周年を迎えた昨年、東京音楽事業センターから定期公演の実施の業務をユニフィル自主公演運営機構に引き継いで、ますます充実の東京ユニバーサルフィル。音楽監督で常任指揮者の三石精一もさらに張り切っているようだ。設立10周年記念公演のひとつ「イタリアオペラ・ガラコンサート」は、東京芸術劇場での邦人オーケストラとしての最高入場者数を記録している。

この4月の定期演奏会は、リムスキー・コルサコフの没後100周年を記念したプログラム。彼には未完を含む4曲の交響曲があるが、なぜかどれもほとんど取り上げられない。今回の交響曲第2番「アンタール」は、プロのオーケストラとしての日本初演となるもの。12世紀に作られたアラビアの通俗物語「アンタール物語」による作品で、砂漠の廃虚に住む世捨て人アン

タールが一匹のカモシカを助けたことで、人生の3つの喜びを与えられる、というストーリー。中世のアラブを感じさせる、濃厚なオリエンタリズムが魅力だ。三石自身も「知られざる名曲を紹介できるのは演奏者としてもうれしい」と語っている。同じリム

スキー・コルサコフの組曲「シェエラザード」もオリエンタリズム満載の美しい作品だが、重要なヴァイオリン・ソロをソロ・コンサートマスターの後藤龍伸が担当するのも聴きもの。音楽的で音色に色気がある、と三石も太鼓判を押すヴァイオリンだ。そしてもうひとつ、プロコフィエフのピアノ協奏曲第3番を、得意としている小川典子が弾く。



三石精一

彼女は三石の大好きなピアニストのひとりだという。独特の雰囲気を持ったプログラムは、オーケストラの魅力も存分に楽しませてくれるだろう。

文：堀江昭朗

★ 4月26日(出)・東京芸術劇場

● 発売中

問：ユニフィルチケットセンター  
03-3974-6557